

# 寺報

平成二十七年十月

第七十二号

正念寺護持会発行

常陸太田市久米町二十一

電話〇二一九四一七六一〇五八

FAX〇二一九四一七六一〇一六九

## 蕎麦打ち教室報告

九月二十日に第一回目の蕎麦打ち教室を常陸太田市交流センター「ふじ」の調理室に於いて、ご門徒の和田政一様を講師に開きました。道具は調理室備え付けのものをお借りしましたが、蕎麦粉などは講師の和田さんが用意して下さり、ご厚意に甘えさせていただきました。

今回は、参加を予定されていながら、残念ながら参加出来なかつた方もいらっしゃつたのですが、五人の参加者で和田さんに面倒見ていただき、「あうダメだよ、これ。修正出来つかな?」「えつゝ言われた通りやつたんだけど…」「そんな事言つてねえべよ」などとワイワイガヤガヤ、和氣あいあいのうちに蕎麦粉とつなぎを丁寧に、しかも素早く混ぜる事から始めて、水回し、捏ね、延ばしと作業は続いていきました。

先にも書いたように、言わされた通りに作業をし



第四回	第三回	第二回
十二月二十日	十一月二十一日	十月十八日

今後の予定



最後は、蕎麦切りをして家に持ち帰る事になつたのですが、出来上がつた蕎麦の太さの色々な事：よく言えれば個性的。悪く言わないでも普通に言つたら不揃いの蕎麦に：さすがに和田さんの蕎麦はみんなそろつてきれいにしかも細く切れておりますが、この太い細い、揃つてる不揃いの差は、十二月の最終回までに講師の和田さんの麵に近づく事が出来るや否や。

上達具合の結果報告は、年越し蕎麦を食べた後にでもするとして、上手下手は置いておいて、自分の打つた蕎麦は、何物にも代えがたい味がしました。

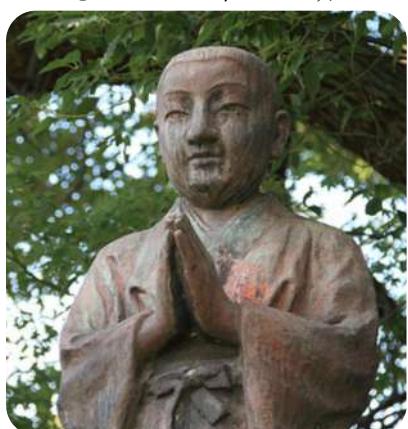
# しんらんさま

親鸞さまは、鎌倉時代に活躍され、その一生を法然聖人のお弟子という自覚を持つて過ごされた方でした。しかし、親鸞聖人のひ孫にあたる「覺如」という方が、親鸞さまを本願寺の初代（宗祖）として定め、それ以降親鸞さまが初代で、二代目を孫の如信、三代を覺如として「血縁」によつて本願寺の系統をつないでいくという伝統が生まれました。

ところで、親鸞さまの事について私たちはどうのくらい知つてゐるでしょうか。京都でお生まれになり、法然聖人のお弟子になりました、その後に越後国（現新潟県）に流罪になつて、勅免の後は常陸国（現茨城県）に入り各地を布教して回り、晩年に京都に戻られたという大難把な事は知つていても、細かい事についてはほとんど知らないはずです。それもそのはず、親鸞聖人に関しては真宗系各宗派に伝わる伝記の他に、親鸞さまの存在を示す公的な文書が残つていません。そのような事から、一時親鸞さまは実在していないのではないか?と言う声も聞こえた事があつたほどでした。そんな親鸞さまについても、最近では研究が進みつつあり（とは言つても各宗派の伝記をベースにしながら進んでいるようですが）、新たな親鸞像も組み立てられつつあります。

「親鸞再考」をベースに、その他の資料も参考にしつつ書き連ねていこうと思つております。

さて、親鸞さまは、承安三（一一七三）年にお生まれになつた事は



「尊号真像銘文」の奥書によりハッキリしております。ただ、誕生日については、現在旧暦の四月一日（新暦：五月二一日）とされていませんが、ハッキリしてはおりません。ご両親については、父は「日野有範」という下級貴族であつたと言われております。母については、これまたハッキリしてはいないのですが、真宗高田派に伝わる「親鸞聖人正明伝」には、源義家の孫「貴光女」とされていて、また、大和高田市の名称寺に伝わる「日野氏系図」には、源義賢の娘（源義仲の妹）で「吉光禪尼」であると言います。さらに、またまた真宗高田派に伝わる書物ですが、「親鸞聖人正統伝」並びに「正統伝後集」を読むと源義親の子で名を「吉光女」と言うと出て参ります。これは、発音によつて漢字を当てる事があつた事を考えると「貴光女」「吉光女」と捉えれば、文字の違いは然したる問題にはならないと思います。

ともあれ、親鸞さまは、承安三年に日野有範を父とし、源氏の系統である母との間に誕生したと考えられるでしょう。そうして親鸞さまは成長していくわけですが、九歳の時に得度・出家をいたします。ところで親鸞さまは、五人兄弟の長男でした。とすれば、家を継ぐ立場にあつたわけですが、母を亡くした無常觀から得度出家をしたと伝えられておりますが、現在の研究では、その時父親は健在であつたらしいと言われておりますので、下級貴族でもあり、将来的にも暮らし立たないとも考えられていましたが成り立たないとも考えられていましたが、それを裏付けるのかかもしれません。それが出家していると、兄弟全員が出家していると言う事実があります。

さて、出家をして比叡山に登られた親鸞さまの暮らしはどのようなものだつたのでしょうか？

（次へ続く）

# 生活の中の仏教語

先に起きた常総市を流れる鬼怒川の決壊は、未曾有の被害をもたらした、などと使われる『未曾有』は、古代印度のサンスクリット語で「希有なる事」を表す「アドウブタadbhuta」を訳して「未曾有（未だかつて有らず）」と言う文字を当てたものです。

ちなみにこの文字の発音は「みぞう」であつて、どこかの總理が言つたように「みぞうゆう」とは読みません。

元々使われていた仏教の言葉としての「未曾有」は、世間一般の見方と誓う仏教の見方（眞理）や仏陀の大変すぐれた功徳を表す言葉でした。

こんな話があります。アングリ・マーラー（本名：アヒンサー）と言う人は、ある出来事から殺人鬼になり、その親指を首飾りにしておりました。そんな殺人鬼が、お釈迦様の弟子になり、修行をしていく中で「智慧」を開き、穏やかになっていきましたが、アングリ・マーラーに殺された人の親族は、彼を許す事が出来ずに、見かけると石を投げつけました。彼は、それにじつと耐えておりましたが、ある時大ケガをいたします。そして、お釈迦様の膝の上で静かに息を引き取ったと言われております。そして息を引き取った彼を見て、お釈迦様は「過去にどのような罪を犯しても、改心して清らかな心になるならば、彼は雲を離れた月のように輝く。彼は涅槃に達した」と言わされたと伝えられています。

私たちから考えれば、殺人鬼であつた者を躊躇無く弟子に加えた事も「未曾有」なら、過去に罪を犯しても改心したならば輝く人になると言われた事も「未曾有」でありますよう。言い換えれば、お釈迦様の開かれた悟りがそれだけ「未曾有」なものであったのでしょうか。



寺の法要のたびに、その準備に沢山の方々にお手伝いを戴き、本当に感謝しております。とは言ひながらも、「お斎番」ってどんな事をするんだろうとはよく聞かれておりました。ですので、以前の「お斎番」の折りに撮った写真で紹介させて戴きます。今回は、お餅つきをしてその餅をくりぬき、次の日に餅通しをしている光景をご覧下さい。

今後も機会を見つけて、お斎番の様子をご紹介させて戴きます。



# お斎番の様子

感謝錄

ご寄付をいただきました方々を、感謝を込め  
てご報告させて頂きます。

## 一、父の永代経として

金 壱拾萬円

大曾根  
和美様

一、父の永代経として  
金 壱拾萬円

小澤久様

一、父の永代経として  
金 壱拾萬円

酒井大様

卷三

今年も沢山のお仏供米をご奉納戴きました。ここに謹んでご報告させて頂きます。

常陸太田市

井坂 孝一様

井坂 哲也様

井坂  
照雄様  
牛坂  
友之様

井坂  
豊子様

井坂  
浩様

小菌篤樣

小菌  
金次郎様

小菌達雄樣

小蘿  
浩文様

十月九日現在

ご奉納戴きましたお仏供米は大切に使わせて頂きます。



那珂市

小蘭 閑関 仲伸 平山  
光晴様 守様 義信様 昌邦様

住職雜感

暑さ寒さも彼岸まで、とはよく言つたもので、彼岸を過ぎたら本当に涼しくなりました。これから季節、紅葉も見事になつてきますので、旅に出かけるのにも良い季節ですね。

でもこの時期、浄土真宗では、どの寺でも報恩講法要をお勤めしておりますので、私たちは紅葉を見に行くどころではありません。

十一月中旬に当山の報恩講が修行されるのはもちろん、十月下旬から十二月上旬にかけては、淨土真宗のどこのお寺でも報恩講で忙しくしておりますので、紅葉狩りに行つたなどと言う話を聞くと、ちよつと羨ましくなつた

りもします。

すぐに年末の忙しさがやつてきます。お取り越し、除夜の鐘、年が明けて元旦会等々。そういうこうしているうちに、十三日から十五日までご本山の報恩講にお参りをさせて戴きます。

底冷えのする京都ですが、親鸞聖人が八百年以上前にご苦労下さった事が、平成の現在まで繋がっている事に思いを馳せながら、境内にともる提灯の灯りに導かれて、阿弥陀堂・御影堂へお参りさせて戴く。阿弥陀堂から御影堂へ移る頃になると、放射冷却のせいか益々寒くなりますが、命あればこそ、この雰囲気を味わえて本当に良かつた、と毎年の事ながら、つくづくそう思います。